本居宣長旧宅の移築工事にみる保存理念

本居宣長旧宅保存事業にみる保存理念と手法に関する研究 その1

THE PRESERVATION PHILOSOPHY OF THE REMOVING AND RECONSTRUCTION OF THE FORMER HOUSE OF MOTOORI NORINAGA

— The preservation philosophy and methods of preservation activity of
the former house of Motoori Norinaga Part 1 —

矢島平一*, 菅原洋一**

Heiichi YAJIMA and Yoichi SUGAWARA

The former house of Motoori Norinaga was reconstructed in a new location in 1909 by the Suzunoya ruins preservation association which was organized by local volunteer. The report booklet in typography about removing and reconstructing the former house was archived at the Museum of Motoori Norinaga which took over the preservation association. It should be taken that the reconstruction was applied to the cultural preservation technique similar to the temple and shrine at the time when the way of preserving private residence was not established.

Keywords : *Motoori Norinaga, Removing and reconstruction, Preservation of architectural monuments, Repair report, Organization of preserve, Junichi Tsuchiya*

本居宣長, 移築, 文化財保護, 修理報告書, 保存会, 土屋純一

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

近代における文化財保護は、明治30年(1897)に公布された「古社寺保存法」によって、社寺建築の保護活動が始まる。一方、民家は、大正8年(1919)に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が公布されることで「史蹟」として初めて保護の対象となる。本居宣長旧宅は、大正11年(1922)に史蹟(現在は特別史蹟)指定を受けているが、これに先だって明治39年(1906)に設立された鈴屋遺蹟保存会により、明治42年(1909)には松阪城跡への移築修理工事が行われている。この移築修理工事は、民家に対する保護の制度が未成熟な時期に、制度的な裏付けなく実施されたものとして注意を引く。

保存会はその後、昭和17年(1942)に財団法人鈴屋遺蹟保存会に改組され、昭和45年(1970)には本居宣長記念館を開設し、更に平成23年(2011)に公益財団法人となり、現在に至っている。鈴屋遺蹟保存会には、設立時の明治39年(1906)から昭和24年(1949)までの書類を綴じた簿冊『財団法人鈴屋遺蹟保存会 各種資料集』(以下『簿冊』)があり、この中には保存会の会務報告と移築工事に関する報告からなる活版印刷の報告冊子(書名・奥付はない。本論では『移築事業報告書』と仮称し、また『報告書』と略称する)が含まれている。

ここでは、主としてこれらの資料に基づいて、鈴屋遺蹟保存会の活動と本居宣長旧宅の移築修理工事を検討し、萌芽期にあった民家

の保存の理念や手法と、これを報告する『移築事業報告書』の性格を明らかにする。

2. 本居宣長旧宅移築計画

2-1. 鈴屋遺蹟保存会の創立

近代における本居宣長顕彰は、明治7年(1874)、宣長門下や地元有力者が関与して、山室山の宣長の奥墓の傍らに宣長を主神とし、

図1 移築前(明治41年)本居宣長旧宅 (本居宣長記念館所蔵)

本稿は、2006年度日本建築学会東海支部学術研究発表会(発表場所: 愛知工業大学 発表日: 2007年2月17日)で発表されたものについて加筆・再構成したものである。

* (株)キッツ技術本部 修士(工学)

Product Development Dept., KITZ Corporation, M. Eng.

** 三重大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

Prof., Dept. of Architecture, Mie University, Dr. Eng.

あわせて平田篤胤を祀る山室山神社を創始したことに始まる。同神社は明治 22 年 (1898) には松阪城下の殿町追手筋に移築されるなど、宣長顕彰の活動は継続され、これに加えて明治 34 年 (1901) には本居宣長百年祭があり、その準備活動を通じて宣長に対する評価は高潮していった。

鈴屋遺蹟保存会は、明治 39 年 (1906)8 月に設立された。設立に当たっては三重県知事有松英義他 50 名が発起人となり、賛助人として、三上参次、上田萬年をはじめとする学者も名を連ねている。会長は、有松英義であり、事務所は三重県飯南郡役所内に置かれた。

創立目的は、簿冊中の「贈従三位本居宣長大人遺跡保存會趣意書」によると、「先生の遺品と、現在の遺跡と、併せて、之を永遠に保存し、以て國民教育の活材料に供し、先生の苦學精勵尊王愛國の感化をして、長へに國民の上に在らしめんと欲す」とある。^{注 1)}

この時期には、全国的にも遺跡に対する保存活動が見られる。西村幸夫によれば史蹟名勝天然紀念物保存法 (1919) 以前の雑誌等にあられた「史蹟」保存のための活動団体は、明治 33 年 (1900) 前後から、全国的に増えている。^{注 2)}

その多くは地域の旧蹟及び神社寺院に対する保存を目的とするもので、偉人旧宅の保存を目的とする活動団体は少なく、鈴屋遺蹟保存会は、偉人旧宅の保存を目的とする活動団体の先駆的存在であった。

2-2. 旧宅保存論の推移

この間、明治 26 年 (1893)3 月 29 日には魚町 2 丁目から出火し、市街地の殆ど (焼失家屋 1,318 戸、神社 4 社、寺院 12 ヶ寺、官公庁 5 ヶ所) を焼き尽くす松阪大火が発生している^{注 3)}。宣長旧宅が所在した魚町 1 丁目は難を逃れたが、これは旧宅の保存について問題を投げかけることとなった。なお、移築までの年譜を表 1 に示す。

旧宅保存については、大火後間もない明治 28 年 (1895) には、殿町の山室山神社周辺に移築する案^{注 4)} が先行した。その後、旧宅所在地が密集した市街地であることから、火災の被害を避けるために近隣の敷地を購入して公園化する現地保存案が浮上した^{注 5)}。しかし、この案では土地取得費が多額となるため見送られて、明治 34 年 (1901) の本居宣長百年祭前後には、城跡移築案にほぼ収束を見たようである^{注 6)}。鈴屋遺蹟保存会は、会設立と期を同じくして、城跡の町有地を旧宅の移転地として借り入れており^{注 7)}、旧宅の城跡への移築は、保存会としては既定の方針であった。

昭和 17 年 (1942) の保存会の財団への改組に当たって作成された後年の資料ながら、簿冊中の「鈴屋遺跡保存会に就て (財団改組事前調査) 』には、「保存会当初の案としては遺蹟を元地にそのまゝ保存し周囲を取払ひ一小公園風と為す見込みなりしに右は巨額の資金を要し到底現実の見透しつかざりしを以て是れを他に移転することとし移転地の物色に奔命せるも不幸再度の難関に遭遇せるも結局今の公園内に選定を見るに至れり。」とあり、城跡への移築案に先立って、現地での保存が検討されたものの、それは経費難から実現に至らなかったことがわかる。

2-3. 鈴屋遺蹟保存会の事業

鈴屋遺蹟保存会の具体的な事業は、簿冊中の明治 39 年 (1906)8 月の「保存会趣旨書」^{注 1)} によれば、総額 30,000 円の寄付金を予定し、

表 1 移築までの年譜

和暦	西暦	事 項
明治 7	1874	山室山奥墓周辺に山室山神社創建 ^{注 8)}
明治 22	1889	山室山神社を殿町追手筋に移転 ^{注 9)}
明治 26	1893	3.29 松阪大火、魚町 2 丁目から出火、焼失家屋 1,318、神社 4、寺院 12、官公庁 5 ^{注 3)}
明治 28	1895	殿町追手筋に旧宅移築保存の議論あり ^{注 4)}
明治 30	1897	(6. 5 古社寺保存法公布)
明治 34	1901	宣長翁百年祭挙行 ^{注 10)}
年不詳		旧宅を元地にそのまま保存し、周囲を取り払い公園風とする検討あり ^{注 5)}
明治 39	1906	5. 31 松阪城跡の町有地借入願提出 ^{注 7)} 8. 鈴屋遺蹟保存会結成、旧宅及び遺品の保存を目的として募金開始 (予定総額 30,000 円、内訳遺蹟保存費 3,000 円、記念文庫建設費 15,000 円、維持基金 10,000 円、諸雑費 2,000 円) ^{注 1)} 9. 10 贈従三位本居宣長遺蹟保存料として金 500 円下付 ^{注 11)} 12. 募集期間終了、達成額 15,000 円余 ^{注 6)}
明治 40	1907	10. 鈴屋遺蹟保存会、資金難のため当初の事業目的から記念文庫を割愛し、名古屋高等工業学校教授土屋純一、神宮司庁技手奥野栄蔵に工事設計及び監督を委託 ^{注 6)}
明治 41	1908	12. 27 実測調査着手 ^{注 13)}
明治 42	1909	2. 建築解体に着手 ^{注 13)} 5. 上旬 須屋根・足場掛渡しに着手 ^{注 13)} 5. 14 土台据付、順次建方に着手 ^{注 13)} 6. 6 事務所・倉庫竣工 ^{注 13)} 10. 3 造作類終了、建具修補、残工事施工 ^{注 13)} 12. 下旬 移築工事完成 ^{注 13)}
明治 43	1910	1.12『報告書』刊行
大正 8	1919	(4. 10 史蹟名勝天然紀念物保存法公布)
大正 11	1922	3. 8 本居宣長旧宅、旧宅跡史蹟指定

その内訳は 3,000 円を遺蹟保存費に、15,000 円を記念文庫建設費に、10,000 円を維持基金に、2,000 円を維持費に充てるものであった。

しかし、募金を行って得られた総額は、同年末で下賜金 500 円を加えて 15,000 円余であり、予定額を得ることができなかった。このため、文庫建設は後日に譲ることとし^{注 6),12)}、実施した事業は、表 2 のように、鈴屋移転、事務所、倉庫、門、塀等の建築、庭園の建設、跡地の修築などに限定された^{注 13)}。

このうち、山室山神社への祭器納屋移転 (注 旧宅に隣接していた) を別とすれば、鈴屋遺蹟保存会の整備事業は、松阪城跡への旧宅の

表 2 事業の諸経費決算額 ^{注 13)}

事 項	金 額
総額	15,491 円 17 銭 9 厘
鈴屋移転費	2,232 円 59 銭 2 厘
鈴屋附属建物建築費	624 円 18 銭
事務所新築及備品買入費	2,978 円 19 銭
事務所附属建物建築費	384 円 4 銭
倉庫及伝廊下新築費	975 円
門、塀、石段、石垣、修築及庭園造設費	2,049 円 17 銭 5 厘
祭器納屋、神社境内へ移築費	112 円 47 銭
鈴屋移転後修築費	454 円 71 銭
設計及監督諸費	1,297 円 94 銭
寄付募集費其他事務諸費	4,382 円 88 銭 2 厘

図2は、『報告書』の添付図（詳細は3-10.で述べる）中の移築配置図であり、城跡への移築工事全体の配置を示す。計画地は、松阪城跡南側の市内を一望できる高台であり、施設出入を東側の表門からとしている。眺望の良い前庭を南側に設け、表門から西方向へ事務所、倉庫、旧宅を配置し、施設を囲うように管理用の堀が巡っている。

以上の整備事業に関わった技術者として、『簿冊』中の「鈴屋移築顛末」^{注6)}では、「文庫建設は暫く之を後日に譲り、先づ移転工事のみ之れを進行することとし名古屋高等工業学校教授工学士土屋純一、神宮司庁技手奥野栄蔵の両氏に工事設計及び監理を託し明治四拾貳年二月工を起し同年十月全く之れを竣工せり」とする。

[illegible]

表3 土屋純一及び奥野栄蔵が関わった修理工事

和暦	西暦	関連修理工事	土屋純一経歴
M30	1897	新薬師寺本堂 法起寺三重塔	M30-M34 関野貞(当時:奈良県技師)の 右腕として働く
M31	1898	唐招提寺金堂	
M32	1899	薬師寺東塔	
		秋篠寺本堂	
M33	1900	東大寺法華堂	M33 東京帝国大学工科大学建築学科 卒業、同大学院へ進学
		興福寺五重塔 室生寺五重塔	
M34	1901		
		新薬師寺鐘楼	
M35	1902	法輪寺三重塔 雷庵寺東塔 法隆寺中門	M35-M39 奈良県技師 ・奈良県地方教育委員 ・神職尋常試験委員 ・寺司社掌試験委員 歴任
M36	1903	東大寺金堂	
		談山神社十三重塔	M36 古社寺建造物修理事務所 技術部長
M37	1904	建水分神社本殿	
M38	1905	慈眼院多宝塔	
		*長福寺本堂	
M39	1906	*唐招提寺講堂	
M40	1907		M39.6 奈良県技師 辞職後 文部省官房建築課へ
M41	1908		M40 名古屋高等工業学校 講師 M41 名古屋高等工業学校 教授
M42	1909	M41.12.27-M42.12 本居宣長旧宅移築工事	
T8	1919	T8【史蹟名勝天然記念物保存法】成立	

各修理工事の工期及び、監督技師・主任技手については、清水重敏『明治後期の古社寺修理にかかわる技術者の出自について』日本建築学会計画系論文集 第558号、P.261、2002.8より、「表 明治30年代における古社寺保存法による建造物修理の工期と監督技師・主任技手」を参考。

ち古社寺保存法による修理事業の開始とともに、当時奈良県技師であった関野貞の右腕として働き^{注15)}、寺院の修理工事に関わっていた。また、大学院を経て同35年(1902)からは奈良県技師として正式に修理工事に関わる^{注14)}。修理工事の技師としての活動は同39年(1906)までであり、これ以降は名古屋高等工業学校教授に転出している^{注16)}。

一方、奥野栄蔵は、奈良県古社寺修理工事の修理技手採用時の明治36年(1903)5月付けの履歴書^{注17)}によると、明治32年(1899)6月から33年(1900)まで造神宮技手を務め、その後神宮司庁雇員として皇大神宮行在所、参集所、神宮司庁、御塩神社神殿、神宮御物陳列場の工事監督を歴任している。その後、奈良県の古社寺建造物修理技手として、明治36年(1903)7月7日から明治39年(1906)3月27日まで務める^{注18)}。この間“主任技手”の立場で「樞原神宮本殿」の屋根修理工事、「長福寺本堂」及び「唐招提寺講堂」の解体修理工事に関わっている^{注18)}。これらはいずれも、土屋が監督技師の立場

で関与するものである。土屋と奥野はこのように、奈良県の古社寺修理において、直接の交流をもっていた。奥野は、奈良県の古社寺建造物修理技手を退任後、神宮司庁嘱託として再び神宮の営繕工事に関わり、建築学会名簿には、明治39年(1906)から同43年(1910)までは、宇治山田市大字船江の住所で登録されている。

その他、奥野については、平安遷都千百年記念祭のメインパヴィリオンである記念殿の工事(明治26年(1893)9月造営開始)、伊東忠太(設計監督技師)がはじめて日本建築の実務に携わったとき、技術的に支えたことで知られている佐々木岩次郎の配下に属し、のちに修理工事に携わる2人弟子の内の1人が奥野栄蔵であった事が知られる(もう1人は青池安太郎)^{注18)}。また、奥野は、伊東忠太の紹介^{注18)}で明治30年(1897)7月に建築学会に入会しており、その建築学会準員になったときの住所は「京都市仏具屋町通松原下ル 佐々木岩次郎方」^{注19)}となっている。以上から、奥野は出身は伊勢であるが、建築技術を学ぶために明治32年(1899)以前まで京都の佐々木岩次郎を師匠とし、いったん造神宮使庁、神宮司庁で関連施設の営繕を行ったのちに、明治36年(1903)から奈良県における古社寺建造物における修理工事に携ったことがわかる。

このような土屋、奥野への委託の理由やその経過は不明であるが、鈴屋遺蹟保存会の発足当時、松阪に近接の宇治山田に居住する奥野の縁で、土屋への委託に至ったものであろうか。表3は、土屋と奥野が関わった修理工事を整理したものである。

3. 移築工事の分析

3-1. 旧宅移築事業報告書

『報告書』の構成は、表4の通りである。冒頭の会務報告は保存会としての事業・会計の報告であり、保存会側が作成したとみられる。一方、緒言以降は旧宅の移築工事に関する技術的報告である。緒言には、明治43年(1910)1月12日の土屋純一の識語があり、

緒言以降は土屋純一の執筆編集と見てよいであろう。また、添付されている図面(図2,3,4を含む)は、実測図面及び落成図のみであり、復原図は添付されておらず、作成の有無も不明である。図面目録は、表6の通りである。

特筆すべき点は、『報告書』が建造物の修理工事報告書としては極めて早い段階で作成されている点にある。古社寺保存法の公布により、明治30年(1897)代から本格的に古社寺建築の修理工事が始まるが、同法施行細則では工事計画については、保存金下付出願願書に「修理すべき物件ノ名称、所在、種類、品質、員数、形状、寸尺、構造、坪数歴史ノ証徴、由緒ノ特殊又ハ製作の優秀等ヲ証見スルニ足ルヘキ事項」とともに、「修理ニ要スル工事予算並設計仕様等」を詳具すべきこととしている。又「修理竣リタルトキハ精算書ヲ添ヘ二箇月以内ニ内務大臣ニ届出ツヘシ」とあり、工事の報告は精算書提出が義務づけられているのみであった^{注20)}。

修理工事報告書の初期の例としては、東大寺金堂の明治修理について所有者の東大寺が刊行した『大仏及大仏殿史』があり、刊行が

表4 旧宅移築事業報告書目次

- 鈴屋遺蹟保存会々務報告
- 緒言
- 移築設計方針
- 鈴屋在来ノ状況
 - 第一、移築前ノ形状
 - 第二、建築当初ノ形状
 - 第三、書斎ノ増設
- 工事ノ経過
 - 第一、移築ニ際シ形状ノ復舊
 - 第二、移築工事実施
 - 第三、附属高塀ノ新築
 - 第四、在来敷地ノ修築
- 附属工事
- 鈴屋舎移築工事圖面目録

慣例になるのは、昭和9年(1934)に始まった法隆寺昭和大修理からとされる^{注21)}。また、昭和11年(1936)頃から全国各地の修理工事で、法隆寺昭和大修理に触発されるかたちで修理工事報告書を刊行する例が増す^{注21)}。

『報告書』は、保存会の会務報告と、中心的事業である旧宅移築修理工事の報告を合わせるものであり、表題や奥付は欠くが、緒言にある明治43年(1910)1月に近い時期に、鈴屋遺跡保存会が刊行したのと考えられる。印刷部数や配布対象は不明であるが、移築事業が募金によって行われたものであることから、拠金者への報告の性格を持つものであることが推測される。なお、簿冊によると旧宅移築竣工後の10月4日に保存会による奉告祭が行われ^{注22)}、翌6日に土屋純一同席による鈴屋舊宅移轉報告祭が行われている^{注23)}。

『報告書』は、修理工事報告書が未だ一般化していない時期に極めて早く刊行されたこと、更に対象となる建造物も古社寺ではなく民家であることが注目される。次に、『報告書』の構成と内容について、項目ごとに順を追って検討していく。

3-2. 緒言

表5 移築設計方針

移築設計方針

抑遺跡保存事業ハ其本来ノ性質上現在ノ位置ニ於テ現状ノ儘ニ保存シ破損腐朽等ニ際シテハ原形ニ倣ヒテ修補ヲ加ヘ永ク後世ニ傳フルノ方法ニヨルベキヤ明ナリ 然ルニ此鈴屋遺跡ニアリテハ現存位置ニ於テ保存ノ方法ヲ講ゼントスルモ周囲ハ商家密接軒ヲ並ベ一朝火災ニ當リテハ忽チ類焼ノ危険恐ルベキモノアリ 而モ又近隣敷地ヲ廣ク購買シテ區域ヲ擴大シ此等ノ虞ナカラシメンニハ全ク資力ノ許サルコト即チ建物ヲ他ニ移築シテ保存スルノ策ヲトラントスルモノニシテ蓋シ已ムヲ得ザルニ出ツルナリ 從ツテ在來位置ニ於テスルモノト異リ周囲ノ状況其他一層周到ナル注意ヲ要スルモノアルベキハ言フ俟タズ 殊ニ其鈴屋翁以後ノ變更ニ係ルモノハ此際復舊シテ書齋増設當時ノ状況トナサント欲スルモノナルヲ以テ移築以前ノ現況ハ工事終了ト共ニ多少ノ變更ヲ來スベキハ明ナリ 即チ移築設計ノ方針トシテハ先ツ建物各部ニ亘リ精細ナル實測ヲナシ縦横幾多ノ断面圖ヲ調製シテ舊狀ヲ知ルヲ得セシムルコト、シ然ル後建物全部ヲ解放シテ新敷地ニ運搬移築ヲナスモノニシテ尚ホ移築ニ當リ建物ノ方向ニ異變ヲ來サバ朝夕光線ノ關係全然相違シテ舊様ヲ懷想スル能ハザルベキヲ以テ新敷地ニ於テモ其方向ハ全然一致シテ寸毫ノ相違ナカラシメ庭園ハ樹木等ヲ移植スルトキハ枯死セシムルコトナキヲ保シ難キヲ以テコレヲ移轉ヲナサズタゞ新敷地ニ於テ其舊形ヲ模造シテ幾分其状況ヲ彷彿タラシメ礎石モ亦舊位置ニ存シテ移築ニハ悉ク新材ヲ使用スルコト、セリ コレ蓋シ其位置ヲ確實ニ保存スルト共ニ他日再ビ近隣ヲ擴大シテ此位置ニ復舊スルヲ得ルノ日アラバ直チニ其復舊ヲ容易ナラシムベキヲ想ヘバナリ 其他ハ建物全部新敷地ニ移築ヲナシ細部ノ形状手法ニ至ルマデ毫モ舊様ヲ失ハザランコトヲ勉メ鈴屋翁以後ノ變更ニ係ルモノニシテ其當時ノ舊様ノ調査ノ結果明瞭ナルヲ得タルモノハ一々痕跡ニヨリテコレヲ復舊シ舊形ノ詳カナラザルモノハ徒ニ變更ヲ加フルコトヲナサズバ在來ノ儘ニ存シテ移築工事ヲ完了スルコトセリ

本居宣長記念館『財團法人鈴屋遺蹟保存會 各種資料集』所収

『報告書』内の「移築設計方針」全文を上記に記す。

緒言では「鈴屋遺蹟保存會ガ其事業ノ一部トシテ移築工事ヲ實施スルニ當リ不肖其依囑ニ應ジテ設計及監督ニ從事シ幸ニ無事終了ヲ見タルヲ以テコゝニ其當初ヨリノ設計方針施工ノ方法及経過等ヲ畧述シテ報告ニ代ヘント欲ス コレ蓋シ徒ニ幾多細密ナル苦心ヲ告白セントスルモノニアラズ タゞ在來ノ舊形ト移築後復舊現状トヲ見テ濫ニ變更ヲ加ヘタルモノトシテ疑惑ヲ抱ク人ナキヲ保シ難キヲ以テ其理由ヲ詳説シテ誤ヲ後人ニ傳フルコトナカラシメント欲スルニ過ギザルナリ」とあり、報告書の基本的性格を示す。

即ち、この冊子は移築工事の設計方針、施工方法、経過を略述して工事報告にあてるものである事、工事による変更点とその理由を明確にする事を意図するものであった。このような基本的性格は、その後の文化財建造物の修理工事報告書と共通するものといえよう。

3-3. 移築設計方針

ついで報告書では、移築について、次のように述べる。「抑遺跡保存事業ハ其本来ノ性質上現在ノ位置ニ於テ現状ノ儘ニ保存シ破損腐朽等ニ際シテハ原形ニ倣ヒテ修補ヲ加ヘ永ク後世ニ傳フルノ方法ニヨルベキヤ明ナリ 然ルニ此鈴屋遺跡ニアリテハ現存位置ニ於テ保

図3 第貳拾七圖 鈴屋舊敷地平面五拾分之二圖

存ノ方法ヲ講ゼントスルモ周圍ハ商家密接軒ヲ並ベ一朝火災ニ當リテハ忽チ類焼ノ危險恐ルベキモノアリ 而モ又近隣敷地ヲ廣ク購買シテ區域ヲ擴大シ此等ノ虞ナカラシメシニハ全ク資力ノ許サバルトコロ即チ建物ヲ他ニ移築シテ保存スルノ策ヲトランツルモノニシテ蓋シ已ム得ザルニ出ツルナリ」(表5に全文を記す)ここでは、遺蹟保存は本来原位置で行うべきであること、しかしながら、鈴屋は類焼の危険性と資金の制約上、やむなく移築保存を行うことが示されている。

また、復原の年代については「鈴屋翁以後ノ變更ニ係ルモノハ此際復舊シテ書齋増設當時ノ状況トナサント欲スル」と記され、本居宣長当時の状態に復旧することが所与の前提となっている。このため、工事前後で多少の変更を伴うことは明らかであるため、「先ツ建物各部ニ亘リ精細ナル實測ヲナシ縦横幾多ノ断面圖ヲ調製シテ舊状ヲ知ルヲ得セシムルコト、シ然ル後建物全部ヲ解放シテ新敷地ニ運搬移築ヲナス」とする。この“精細ナル實測”により描かれたものが、添付図面 27 図中、18 図を占める実測図面であり、3-10. で述べる。

移築工事の設計手法で特徴的なこととして、移築後の跡地の計画をあげることができる。報告書には、「礎石モ亦舊位置ニ存シテ移築ニハ悉ク新材ヲ使用スルコトトセリ コレ蓋シ其位置ヲ確實ニ保存スルト共ニ他日再ビ近隣ヲ擴大シテ此位置ニ復舊スルヲ得ルノ日アラバ直チニ其復舊ヲ容易ナラシムベキヲ想ヘバナリ」とあり、跡地の保存についての配慮を記述している。なお、図3はその言述を表す移築元の敷地実測図である。

また、「移築ニ當リ建物ノ方向ニ異變ヲ來サバ朝夕光線ノ關係全然相違シテ舊様ヲ攘想スル能ハザル」ため、移築先の敷地においてもまったく同じ方向になるように旧宅を配置することとしている。

最後に復原の方針として、報告書では次の3点の原則を示している。

- (1)「細部ノ形状手法ニ至ルマデ毫モ舊様ヲ失ハザランコトヲ勉メ」
- (2)「鈴屋翁以後ノ變更ニ係ルモノニシテ其當時ノ舊様ノ調査ノ結果明瞭ナルヲ得タルモノハ一々痕跡ニヨリテコレヲ復舊シ」
- (3)「舊形ノ詳カナラザルモノハ徒ニ變更ヲ加フルコトヲナサズ」

以上の考え方は、明治後期における原形の調査追究、技法と古材の継承に着目した修理手法の一例と位置付けられ、今日における復原手法との一貫性を読み取ることができる^{注24)}。

3-4. 鈴屋在来ノ状況

次に、2つ目の項目である「鈴屋在来ノ状況」を分析していく。同項は、a. 移築前の形状、b. 建築当初の形状、c. 書齋の増築、の順で記述されている。

まず、a. 移築前の形状では、全体の平面構成と建具、天井、屋根形状・屋根葺材、中庭高塀の仕様、外壁面の仕様などの概要を記している。

ついで、b. 建築当初の形状では、形式手法と所蔵棟札から建築年代を元禄4年(1691)とし、実測調査による痕跡類、明治10年(1877)前後になされた直近の改造前の状況についての関係者聞き取り、別途保存の古材調査などをもとに、復原と改変の検討を行っている。

「當家屋ハ形式手法ヨリ考フルモ所蔵棟札ヨリ推スモ元禄四年ノ新築ト見ルベキモノニシテ其後書齋ノ増築アリ 尚實測ニ當リテ發見セル幾多ノ痕跡及施工ノ方法等ヨリ考フルニ數度ノ修繕ヲ經ル毎ニ細部ニ多少ノ變更ヲ來シ就中明治十年前後ニ於テ大ニ模様替ヲ施サ

レタルハ現ニ高尾九兵衛氏及本居清造氏等ノ熟知セラル、所ニシテ今移築ト共ニ鈴屋翁當時ノ状況ニ復舊ヲ試ミントスルニ當リ此等數氏ノ記憶談及痕跡其他各方面ヨリ調査セル結果ニヨリ當初ノ形状ニ関シテ以下項ヲ分チテ其當初ノ形状ヲ論ジ復舊ノ由來ヲ詳説セントス」 なお、図4は移築前の状況を記した平面実測図である。

特に書齋鈴屋の増築については、旧宅の本質的価値をなす部分であるため、項を分けて、c. 書齋の増築で検討を行っている。

3-5. 工事の経過

「工事の経過」では、a. 移築に際し形態の復旧、b. 移築工事実施、c. 附属高塀の新築について記している。a. 移築に際し形態の復旧では、「鈴屋在来ノ状況」を受けて、16の復旧箇所を列挙している。その前文では「舊形ノ明瞭ナルモノハ一々其痕跡ニ就テ周到ナル注意ヲ以テ復舊ヲナシ 假令變更ノ跡明カナルモ舊形明瞭ヲ缺クモノハ在来ノ儘ニ存置スルコトトセリ 即チ復舊ヲナシタル箇所ヲ列擧スレバ左ノ如シ」と、確実なものに限って復原するとし、「移築設計方針」で述べた方針を再確認した上で、35箇所及ぶ現状変更を箇条書で示している。

図4 第壹図 鈴屋平面實測五拾分之二圖

3-6. 移築工事実施

工事日程は、表 1（表中 明治 41,42(1908,1909) 年）の通りである。施工上の基本的方法としては、主に 3 点について明記している。1 点目は「材料ハ漸次新敷地建築場ニ運搬シ書斎ノ材料其他重要ナル諸材料ハ特ニ適當ノ保護ヲ加ヘ一時本居氏倉庫内ニ保管ヲ依托スル」、2 点目は「解放セル材料ニシテ再度使用ニ堪フベキモノハ手入レ繕ヒヲ充分ニナシ」、3 点目は「取替ヲ要スルモノハ新材ヲ購入シテ在來ノ形状寸法ニ倣ヒテ施工ヲ進メ」である。

また、補強については、「實施ニ當リ床組及小屋組等ノ見エ隠レノ部分ニシテ構造ノ方法宜シキヲ得ズ保存上不適當ト認メタルモノハ便宜補加シテ構造の堅牢ヲ期セリ」とし、具体的には床組全体への足固めの使用、梁、母屋、登合掌の付加、金物による緊結、筋交の使用、野木舞の裏板張への変更などを挙げている。

3-7. 附属高塀の新築

「附属高塀ノ新築」では、移築後の旧宅前面向かって右側面の、中庭に面する高塀の新築について記述している。魚町にあってはこの位置に隣家があり、中庭は隣家の側壁で画されていたため、存在しなかった高塀であるが、移築後は中庭を区画するため、新築したものである。新築に当たっては「諸般研究ノ結果、鈴屋増設当初ニ於ケル隣接屋蓋ノ高サヲ調査シ之レニ倣ヒテ隣家側面トモ見ルベキ傾斜セル高塀ヲ建設スルコトヽセリ」とし、高塀の設置は、書斎増設時の隣家屋根形状を模す事としている。特に高塀の勾配及び位置について特にその根拠が記されている。移築工事に伴う周辺環境の変化を最小限に留める配慮が伺われる。

表 6 鈴酒舎移築工事圖面目録

図番号	図名	縮尺
第壹號	鈴酒舎平面實測圖	五十分ノ一
第貳號	鈴屋建面實測區分圖	五十分ノ一
第參號	ウカ 断面實測圖	五十分ノ一
第四號	ワ井 断面實測圖	五十分ノ一
第五號	イオ 断面實測圖	五十分ノ一
第六號	ヲル 断面實測圖	五十分ノ一
第七號	ヌク 断面實測圖	五十分ノ一
第八號	ハナ及レチ 断面實測圖	五十分ノ一
第九號	子ニ 断面實測圖	五十分ノ一
第十號	ツホ 断面實測圖	五十分ノ一
第十一號	ヘソ 断面實測圖	五十分ノ一
第十二號	リタ 正面實測圖	五十分ノ一
第十三號	ラロ 背面實測圖	五十分ノ一
第十四號	ヨム 側面實測圖	五十分ノ一
第十五號	イト 側面實測圖	五十分ノ一
第十六號	天井及化粧屋根裏見上ゲ實測圖	五十分ノ一
第十七號	階上書斎天井及階下舊天井見上ゲ實測圖	五十分ノ一
第十八號	小屋組及階上書斎平面實測圖	五十分ノ一
第十九號	鈴屋落成平面圖	五十分ノ一
第二十號	鈴屋落成断面圖	五十分ノ一
第二十一號	鈴屋落成正面圖	五十分ノ一
第二十二號	鈴屋落成背面圖	五十分ノ一
第二十三號	鈴屋落成右側面圖	五十分ノ一
第二十四號	鈴屋落成左側面圖	五十分ノ一
第二十五號	鈴屋落成天井及化粧屋根裏見上ゲ圖	五十分ノ一
第二十六號	鈴屋移築配置平面圖	二百分ノ一
第二十七號	鈴屋舊敷地平面圖	五十分ノ一

3-8. 在来敷地の修築

旧宅移築後の在来敷地については、「礎石及中庭ヲ保存スルコトヽナセルヲ以テ先ヅ在來正面入口ノ部分ニ表門ヲ建設シ其左方建物外側及高塀ノ位置ニ沿ヒテ透高塀ヲ設ケ両側ノ境界ニハ板塀ヲ取設ケ建物跡周圍ニハ葛石ヲ廻ラシ葛石内舊建物下ハ全部砂利敷トナセリ在來礎石ハ一見シテ其位置ヲ見得ベキガ如クセント欲シタルモ如何セン敷地周圍ニ比シテ高カラズ若シ之ヲ現ハサントセバ悉ク周圍ノ地盤ヲ削リテ低下セシムルノ他ナカリシヲ以テ已ムナク其儘手ヲ加ヘズシテ全部砂利ヲ以テ敷キ均スコトヽナセルナリ」とし、礎石と中庭の保存に留意している。特に礎石は地盤に変化を加えて礎石を露出することを避け、砂利での養生を行っている。

3-9. 附属建物 事務所、表門

本居宣長旧宅移築工事における附属工事としては、松阪城跡の新しい敷地周りの整備、表門・事務所・倉庫・渡り廊下の建設、敷地を区画するための高塀・木柵の設置が明記されている。事務所及び表門については、具体的な構造形式や仕様等の記述はない。

旧宅の配置は、南西側石垣を基準とし、魚町道路と同幅の通路を設け、旧宅を魚町旧宅と同方位で配置し、旧宅軸線を延長させる形で「倉庫」「事務所」を配置させていると考えられる。また、「事務所」は、通用門に沿わせる形で北東側石垣に近づけ、「倉庫」は「事務所」と「旧宅」のちょうど中央に配置されていることから、両者から最大限離し、延焼を免れるよう配置されていると考えられる。また、北東側前庭を出来るだけ確保するために、南西側スペースは「事務所」の最低限のセットバックを取り、全体の配置を計画したと考えられる。

3-10. 図面目録

本文末には図面目録が付されている。図面目録には計 27 図の図名が記されており、「第壹圖」から「第拾八圖」までが実測図、「第拾九圖」から「第貳拾七圖」が移築工事の設計図で、断面図、立面図、天井見上図、配置図からなる。これらの原図はそれぞれ 1/50 の墨入図であり、鈴屋遺跡保存会に現存する。詳細図を含んでいないため具体的な収まりを把握することはできないが、各部の実測断面図が豊富であるため、各部屋の展開がよくわかり、立面も仕上材の割付及び仕上材のテクスチャーをも繊細に表現した図面となっている。

4. 結び

以上のように『報告書』の記述は「本居宣長旧宅」については詳細であるが、移転地で旧宅に接続する表門・事務所・倉庫・渡り廊下などの新築建物については配置の概要を記すのみで具体的な構造形式や仕様等の記述はない。また、移築元に現在残されている「倉庫（土蔵）」、また「本居宣長が購入した家屋」に関しては、一切記述されていない。即ち、この『報告書』は、土屋による緒言にも明らかなように、鈴屋遺蹟保存会の全事業のうち、旧宅移築工事に限った記録である。

『報告書』は、この種の報告書の作成が一般化する以前、明治 43 年頃にいち早く作成されたものである。内容的にも一連の工事記録が調査内容、根拠、考察を交えながら明快に記述されており、わかりやすく状況を知ることができる構成となっている。

修理は痕跡調査・聞き取り調査・実測調査に基づいて、復原設計

を行い、根拠の不確実なものは現状のまま留めることを基本としている。また、材料は、可能な限り繕い再用し、取替材は在来の形状寸法に倣って施工を行うこととしている。また、旧所在地の礎石の保護や、移築先では高塀の形状・スケールや前面道路のスケールを旧所在地の町並に基づいたものとするなど、環境整備に関する配慮も周到である。即ち、この工事は古社寺の修理がようやく定着をみたものの、民家については保存の根拠法も存在しない時期に、古社寺の修復手法を適用した事例である。

これらを総合してその先駆性は明らかであり、明治30年代(1897-1906)を通じて奈良県とともに古社寺修理に従事してきた土屋純一、奥野栄蔵が、古社寺修理の経験を踏まえた工事を行い、また古社寺修理では未だ実施されていない修理工事報告書を、いち早く実現したものである。本居宣長旧宅移築事業は、修理に当たっての根拠法も、また種々の制約もない未指定物件についての民間団体の保存会による事業であり、古社寺保存法に基づく特別保護建造物の修理からすれば特異な状況下で、このような報告書が実現できたものと考えられる。保存理念は、今日の修理重要項目^{注25)}に合致し、『報告書』中に記すことで具体性が読み取れる。なお、内容については稿を改めることとし、ここでは『報告書』の性格を明らかにすることのみに留める。

土屋と奥野の関わった「移転工事」は、設計監督諸費の額から見ても、旧宅移築を中核として、事務所、倉庫、門、塀等の建築、庭園の建設、跡地の修築など、この時期に行われた一連の整備事業全般に及ぶものと考えられる。特に事務所や門は、古社寺修理によって把握し得たと思われる細部意匠の創作的な使用を特色とするが、これについては、稿を改めることとし、本稿では旧宅移築工事の保存理念に限定して検討を行うものとした。

謝辞

本居宣長記念館所蔵資料は、著者の一名が参加した三重県近代和風建築総合調査(2004～2008、三重県教育委員会)において、確認されたものです。

本研究を行う上で、本居宣長記念館の門暉代司前館長には、資料閲覧及び建物調査にご協力いただきました。また、清水重敦氏には資料提供いただきました。ここに謝意を表します。

注

- 注1) 本居宣長記念館『財団法人鈴屋遺蹟保存會 各種資料集』所収「贈從三位本居宣長大人遺跡保存會趣意書」(明治39年(1906)8月鈴屋遺蹟保存會創立時)
- 注2) 西村幸夫「『史蹟』保存の理念的枠組みの成立－『歴史的環境』概念の生成史その4」日本建築学会計画系論文報告書(表・1 当時の雑誌等にあらわれた「史蹟」保存のための運動団体一覧(史蹟名勝天然紀念物保存法(1919)制定以前))第452号,P.178,1993.10
- 注3) 『松阪市史 第15巻 史料篇 近代(2)』松阪市,1983 P.524-542「伊勢松阪大火災記録」,「松阪罹災地の調査表」
- 注4) 岩出忠次『遺徳を称えて 山室山神社の祭祀と鈴屋遺蹟の保存』光出版 1994, P.16「宣長翁旧宅保存への動き」
- 注5) 本居宣長記念館『財団法人鈴屋遺蹟保存會 各種資料集』所収「創立當時当事者の苦心顛末」(財団改組事前調査の資料)
- 注6) 本居宣長記念館『財団法人鈴屋遺蹟保存會 各種資料集』所収「鈴屋移築顛末」
- 注7) 『松阪市史 第15巻 史料篇 近代(2)』松阪市, 1983, P.621「(鈴屋舎遺跡保存会より借地願)」松阪町町会議事録 M39

- 注8) 岩出忠次『遺徳を称えて 山室山神社の祭祀と鈴屋遺蹟の保存』光出版 1994,P.3「山室山神社の創祀」
- 注9) 『松阪市史 第10巻 史料篇 民俗』松阪市, 1981 P.281「本居神社」
- 注10) 『伊勢新聞』「本居翁百年祭彙報」明治34年11月5日付
- 注11) 本居宣長記念館『財団法人鈴屋遺蹟保存會 各種資料集』所収「宮秘 往來二八三 ■贈從三位本居宣長遺跡保存料」
- 注12) 『三重縣史談會々志 第壹卷第壹』「鈴屋遺蹟保存會の報告書」P.62-63, 明治43年8月15日発行
- 注13) 本居宣長記念館『財団法人鈴屋遺蹟保存會 各種資料集』所収「鈴屋遺蹟保存會々務報告」 なお、"須屋根"は原文通り。
- 注14) 『名古屋工業大学建築学科百年史』2006, P.108
- 注15) 『学問のアルケオロジー』東京大学創立百二十周年記念東京大学展「帝国大学における「日本建築学」講義」内、[工科大学造家学科]
- 注16) 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善, 1972, P.1834-1836
- 注17) 奈良県文書「明治三十六年黜陟一件」所収 奥野栄蔵履歴書
なお、「御塩神社」は御塩殿神社と思われる。
また、神宮司庁の記録(近代和風建築総合調査の際、人発第563号平成19年12月25日にて受領)によると、明治36年7月8日付で雇を免ぜられ、明治39年4月4日付で再び宮繕事務に嘱託されている。復職後に関わった工事に徴古館農業館(明治45年2月2日嘱託)がある。なお、明治8年12月18日生、大正3年4月28日に38才にて逝去。
- 注18) 清水重敦「明治後期の古社寺修理にかかわる技術者の出自について」日本建築学会計画系論文集 第558号, P.259-264, 2002.8
- 注19) 『建築雑誌』「新入会員欄」第127号, 1897.7, P.206
- 注20) 古社寺保存法施行細則 第四條 明治三十年十二月十五日
- 注21) 『【戦前期】国宝・重要文化財建築物修理工事報告書集成』鈴木嘉吉「記録再生への期待」文生書院, 2005
- 注22) 『大阪朝日新聞』「松坂電報(四日発)」明治42年10月5日
- 注23) 本居宣長記念館『財団法人鈴屋遺蹟保存會 各種資料集』所収「本會重要事項年譜」明治42年10月6日 鈴屋舊宅移轉報告祭
なお、注12)「鈴屋遺蹟保存會の報告書」によると、「此程同會は當初よりの工事設計、施工の方法経過及び収支決算等を報告し會務の一段落を告げたるを示せり」とあり、報告の性格からも奉告祭とほぼ同時期に刊行されたとも考えられる。即ち、奉告祭前後の明治42年10月から、『三重縣史談會々志第壹卷第壹』発行月の明治43年8月の間。
- 注24) 村上訊一『日本の美術 第525号 文化財建造物の保存と修理の歩み』(関ぎょうせい, 2010.2, P.17-25, 「はじめに」より、修理開始当初は修理方針や手法に関して試行錯誤があったが伝統的な手法を用いた後世の改変部は利用に支障のない限り復原することを原則とする修理の基本は、法隆寺の昭和大修理を契機として確立された)とある。また、今日の修理については、重要項目として3点、・綿密な調査研究と確実な資料に基づく修理、・技法の継承と古材の利用、・修理の方針や内容を明らかにした記録を残す、を概説している。

(2013年8月22日原稿受理、2014年3月17日採用決定)